二人の美意識が響きあう —— 黒川侑 × 秋元孝介

独奏の極み、対話の深み

黒川 侑（Yu KUROKAWA）Violin

第75回日本音楽コンクール第1位、聴衆賞他3つの特別賞、第6回仙台国際音楽コンクールで聴衆賞を受賞。これまでにスイス・ロマンド管弦楽団、スペイン国立管弦楽団、東京フィル、京響をはじめ国内外のオーケストラとの共演の他、リサイタル、室内楽はじめ幅広い公演にて好評を博している。

出光音楽賞、青山音楽賞、京都府文化賞奨励賞、岡山芸術文化賞グランプリ等の受賞も多数。「クラシック倶楽部」「題名のない音楽会」等メディア出演も多い。

久末航氏との「ブラームス:ヴァイオリン・ソナタ全集」を含む2枚のCDの他、25年には「バッハ:無伴奏ヴァイオリン・ソナタ集(仮)」をリリース予定。

京都市立芸術大学非常勤講師。

使用楽器はGuarneri del Gesu(1742)。

<プログラム>

L.v.ベートーヴェン:ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ長調 Op.12-2

N.メトネル:ノクターン 第3番 ハ短調 Op.16-3

J.S.バッハ:シャコンヌ ～ 無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番より*

D.ショスタコーヴィチ:前奏曲とフーガ 第24番 ニ短調 Op.87-24**

J.ブラームス:ヴァイオリン・ソナタ 第3番 ニ短調 Op.108

(*黒川ソロ　**秋元ソロ)

＊やむを得ない事情により日時・内容等の変更、中止等がある場合があります。

2025年
9月7日(日)
開場 14:30/開演 15:00
入場料:会員4,500円(座席指定可)/
一般5,000円/学生2,500円(全席自由席)

Shibuya Mitake Salon

秋元 孝介（Kosuke AKIMOTO）Piano

2018年、ピアノ三重奏団「葵トリオ」のピアニストとして、第67回ミュンヘン国際音楽コンクールピアノ三重奏部門で日本人初の優勝。

そのほか、第10回パデレフスキ国際ピアノコンクール特別賞、第16回リヨン国際室内楽コンクール第3位など受賞多数。

日本とヨーロッパを中心にソロや室内楽、オーケストラとの共演で好評を博しており、国内外の音楽祭に出演するほか、テレビやラジオなどのメディアへの出演も多い。

東京藝術大学を首席で卒業後、同大学院修士課程を経て博士後期課程を修了し、博士号(音楽)を取得。ミュンヘン音楽演劇大学大学院に留学したほか、サントリーホール室内楽アカデミーでも研鑽を積んだ。

123 Shibuya Mitake Salon (vol.183)　8th ANNIVERSARY

●ご予約・お問い合わせ株式会社 **ILA**(渋谷美竹サロン) **03-6452-6711**(平日 10:00-18:00)、**070-2168-8484**(繋がりにくい場合)　Webサイト：**https://x.gd/8zEBs**

黒川 侑&秋元 孝介デュオリサイタル

8th ANNIVERSARY

123 Shibuya Mitake Salon (vol.183)

2025年9月7日(日)開場 14:30/開演 15:00

入場料：会員4,500円(座席指定可)/一般5,000円/学生2,500円(全席自由席)

独奏の極み、対話の深み
二人の美意識が響きあう —— 黒川侑 × 秋元孝介

黒川侑のヴァイオリンには、まるで繊細な糸で緻密に刺繍を施すような、丁寧な音の積み重ねが基盤として感じられる。
だが、その刺繍は単なる細工にとどまらず、やがて一枚の絢爛たる着物のように仕上がり、そこには繊細さとダイナミズムとが、互いを損なうことなく見事に調和している。
音が外へ放たれるのではなく、内に充満しながら、静かに、しかし確固たる音楽となって滲み出てくるような様式だ。
だからこそ、バッハの無伴奏、なかでも《シャコンヌ》のような作品において、彼の演奏がいかに際立って傑出したものとなるのか——
そうしたバッハを、ずっと待ち望んでいたのである。

秋元孝介のピアノには、明晰な技巧と、マイスターのような技が調和し、精緻な手さばきがある。
虚飾を一切排し、自己陶酔を感じさせることもなく、細部にいたるまで計算され、構築されているにもかかわらず、その音楽は不思議なほど自然な流れを保ち、一本の太い線となって、最後までぶれることがない。
それはまるで、巨大な氷山にアイスピックを打ち込みながら、その中から緻密な彫刻を削り出していくような——
しかも、その削り落とされた氷片でさえ、結晶が美しく輝いている。
そんな情景が思い浮かぶような、独特な魅力あるピアノ演奏だ。
そんな彼が、ピアニスト人生を通じて弾き続けたいと語る作曲家が、メトネルである。
今回、そのメトネルの作品がプログラムに選ばれている、彼の美学とこだわりが刻まれている。

そんな二人の、妥協の余地がない、熟慮が重ねられたプログラムが、以下である。

L.v.ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ長調 Op.12-2
N.メトネル：ノクターン 第3番 ハ短調 Op.16-3
J.S.バッハ：シャコンヌ ～ 無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番より*
D.ショスタコーヴィチ：前奏曲とフーガ 第24番 ニ短調 Op.87-24**
J.ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ 第3番 ニ短調 Op.108
(*黒川　**秋元)

クラシック音楽というのは、ある意味で、“対話”の芸術でもある。
作曲家の自己との対話、その独白の結晶となっている作品と演奏家の対話、演奏者の自己との対話、
そして、演奏者と聴き手である私たちとの対話である。
それが、外形的には、目の前のピアノとヴァイオリンの対話となって現れるのである。
この夜に並ぶ作品たちは、そうした“対話”を、さまざまな視点から示現してくれるだろう。

ベートーヴェンのソナタ第2番には、若き日の気鋭と、どこか洒脱な遊び心が満ちている。
ブラームス晩年の第3番には、老成と情熱が、まるで沈殿物のように濃密に息づいている。
同じ「ソナタ」と名のつく作品でも、書かれた時代も背景も異なる —— それでもそこに通底しているのは、二つの楽器が語り合う歓びである。

イ長調とニ短調の“対話”を囲むようにして、静かに置かれた二つのニ短調のソロ作品。
バッハの《シャコンヌ》と、ショスタコーヴィチの《前奏曲とフーガ》。
ひとりで奏でるということが、どれほど深く孤独で、同時にどれほど自由で豊かなのか。
黒川が、秋元が、それぞれの音で、その問いを明らかにしていく。
バッハの《シャコンヌ》は、言わずと知れたヴァイオリン独奏の極北、これほど峻厳で、これほど至高の作品はない。
たった一人の奏者の手から、全宇宙が立ち上がる様が示されるバッハの到達した奇蹟である。
ショスタコーヴィチの《前奏曲とフーガ》—— これもまた、孤独な精神の闘いが五線譜に封じ込められた作品である。
秋元の手によって、どんな光と影がそこに浮かび上がるのか —— どんな一期一会となるのだろう…

そして、メトネルのノクターン。
知る人ぞ知る作曲家かもしれないが、聴いてみればきっと納得できるだろう。
ロシアン・ロマンティズムの香りと、ドイツ的な理性の構築、その狭間に立つような響きが続く。
一見、ひっそりとした佇まいのなかにも、崩れ落ちそうなほどの繊細な感情と、形態を保とうとする意志が拮抗する。
音楽という “瞬間の存在” でしかない儚さ、しかし、真実の存在感をも主張する確固たる意志がそこには示されている。

こうしたプログラムの妙味は、それぞれの作品の独自な“濃さ”にあるだけではなく、相互に反射し合い、ブレンドされながら、物語を紡いでいくところにある。
独奏と重奏、モノローグとダイアローグ、若さと老い、古典と現代、それらが、二人の音楽家——黒川侑と秋元孝介——によって、一本の太い線で描かれるのである。

一夜の一演奏会で、これほど多彩な音楽に出会えることもそう多くはないだろう。
確かにこの一夜の演奏会は、私たち一聴き手にとっても、些細な一冒険になるに違いない。

(渋谷美竹サロン)

日本のトップクラスの若手演奏家が、
こだわり抜いた価値ある企画をお届けしていきます。
渋谷美竹サロン(美竹清花さろん)が追求する
“本物の音楽”は、演奏者と参加者とわたしたちの、
三位一体の努力と対話から生まれます。

X(旧Twitter)　instagram　LINE

渋谷駅 徒歩2分
宮益坂、
クラシック音楽サロン、
誕生。

大好評につき
サロン・メンバーズ
追加募集中！

Shibuya Mitake Salon

JR渋谷駅〈宮益坂口・東口〉を出て、左前方の交差点を渡り青山方面へ坂を登る。
渋谷郵便局を過ぎ、ぽてぢゅうと渋谷コアクリニックの間の小道を左折します。

●お問い合わせ
株式会社ILA 渋谷美竹サロン(美竹清花さろん)
東京都渋谷区渋谷1-12-8(〒150-0002)
☎ 03-6452-6711 (平日 10:00-18:00)
070-2168-8484(繋がりにくい場合)
Fax 03(3409)0188

公式Webサイト